



Title	形態素の自立用法と結合用法の関係 : 外来語系語基「メール」の通時的な遷移傾向を例に
Author(s)	金, 妹伶
Citation	阪大日本語研究. 2011, 23, p. 111-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5379
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

形態素の自立用法と結合用法の関係 ——外来語系語基「メール」の通時的な遷移傾向を例に——

Relations between independent usage and unit usage of morphemes : Tendency of diachronic transition of loan word stem "me-ru" as seen in Japanese newspaper

金 姝伶
KIM Juyoung

キーワード：形態素、自立用法、結合用法、連接率、散布図、遷移パターン

要旨

16年間の新聞コーパスに使われた外来語系語基「メール」の自立用法と結合用法の調査結果をもとに、通時的な遷移パターンと両者の関係を定量的に考察した。「メール」を中心に、自立用法では共起する語基、結合用法では共起する造語成分を各々異なり語数で数え、量と方向性を示せる散布図で視覚化した。また、生産性を考慮し、年ごとの初出の共起語と共起成分を調査した散布図の遷移パターンの比較と、同形の共起語と共起成分について量的に概観した。通時データの散布図では、停滞と増加を繰り返す中で、インターネットの発達、携帯電話のメール使用、世相と関連した話題性などを反映して、新しい句と複合語が爆発的に増加する時期が見られたが、特に句の増加がより目立った。

1. はじめに

語基と接辞の分類が重要視されていた従来の派生形態論では、語基には自立用法と結合用法があるといいながらも、同一語基の自立用法と結合用法との間にどのような関係があるかという問題についてはあまり注目してこなかった。これは、自立用法は文法論で、結合用法は語構成論で、というようにそれぞれ別の部門で扱ったことと、語基が単独で使われる自立用法という概念が、結局は「他の語との結合」を示すものだとあまり考えなかったからである。ある語基の結合用法が他の造語成分と結合し複合語を作ることであるとしたら、同じく自立用法は、助辞などをともないつつ、他の語と結合して語結合を作ることであるといえよう。つまり、同一語基が、「結合する」という同じ現象を通して、それぞれ、句と複合語の要素になるのである。

本稿では、このように自立用法と結合用法を同じく形態素の用法として関連づけ、自立用法と結合用法を別々の現象ではなく、両方とも結合として考え、同一語基の自立用法と結合用法という、形態素の結合論として同じ次元で扱う。以下、語基が自立用法で他の語基と結合し句

を成すのを「W 結合」、語基が結合用法で他の語基と結合し複合語を成すのを「M 結合」と呼ぶことにする。例えば「メールを送信する」は「メール」と「送信する」の W 結合、「メール送信」は「メール」と「送信」の M 結合になる¹⁾。本来は異なるレベルである句と語を、このように同レベルで扱うことによって、交代できる要素を持つ句と語の比較も可能になり、W 結合と M 結合の関係の有無、関係があるとしたら、両者はどのような関係にあるのか、どちらを選択することになるのか、或いは無関係なのか、などの課題が生じる。したがって、自立と結合という形態素の特徴をとらえるためには、両者を同レベルで扱い、同じ語基が W 結合と M 結合をとるとき、どのように違うのかを検討する必要がある。

ところで、国立国語研究所の新聞の語彙調査では、形態素の自立用法と結合用法との量的関係を表すものとして「接続率」という尺度を設定している。新聞の語彙調査の報告書 42 (1972) では、「接続率」について以下のように説明している。

ここで、接続率とは次のようなものである。報告 37 は本報告と同じ資料によるものだが、その中の短単位度数順語彙表で「区」は度数 1591 である。ところが本報告位置別集計表の「区」は度数 1583 となっている。これは、1583 回は「～区」などの形で接続して使われ、8 回は「区では～」などの形で単独で使われたことを示している。ここで「区」が接続して使われた割合は

$$\text{“ 接続して使われた度数 ”} \div \text{“ 全体度数 ”} \times 100$$

の式で計算され、この場合、 $(1583 \div 1591 \times 100 \div 99.5)$ である。この数値を接続率という。(国立国語研究所報告 42 : 10)

ここで、「接続して使われ」とは結合用法、「単独で使われ」とは自立用法のことであるから、接続率は、自立と結合の全体に対する結合用法の比率を求めていることがわかる。そして、この報告の筆者は、「接続率の高い語は、語構成要素になったことが多い語であり、「接続率」の高い語の中には、造語能力の高い語のほとんどが含まれている可能性が高い」(同報告書 : 14) と述べ、接続率を造語能力の尺度とみなしているようである。しかし、形態素の造語力、すなわち、結合用法の働き具合をみるばあい、それを自立用法と関係づける必要はない。結合用法がいくつあったかを数えれば済むのであって、自立用法を問題にする必要はないのである。加えて、接続率は、自立用法と結合用法とを「度数」すなわち「延べの使用度数」でカウントしているため、たとえば、同じ(一つの)相手との結びつきであっても、それが繰り返し使われるだけで値が大きくなってしまいう欠点をもっている²⁾。このことは、接続率のもとになっている斎賀(1957)の「結合力」³⁾にも同様にあてはまることである。

このように、連接率という尺度は、形態素の造語力をみるには不十分であり、むしろ、形態素の自立用法と結合用法との関係を表す尺度と考えた方がよい。ただし、そのためには、自立用法すなわち W 結合と、結合用法すなわち M 結合とを、どちらも異なりでカウントし、関係づける必要がある。本稿では、こうした生産性を考慮した方法で、句構成と語構成、すなわち W 結合と M 結合の関係を見据えた計量的方法を提示しながら通時的・定量的に考察する。

2. 調査概要

2.1. 調査対象―外来語系語基「メール」

本稿では、外来語系語基「メール」を対象として、その W 結合と M 結合との関係を調査・分析する。「メール」を対象とするのは、それが近年の新しい外来語系語基であり、W 結合だけでなく、M 結合も、そのほとんどが新たに形成されたものと考えられるからである。W 結合と M 結合との関係を論じる場合、両者とも同一共時態で形成されたものであることが望ましい。その場合、W 結合では問題とならないが、M 結合では、過去に形成されてすでに語彙体系中に安定して存在するものと、問題とする共時態で新たに形成されたものとを区別し、後者を対象とすることが必要になる。ただし、こうした区別は容易ではなく、本稿では、近年形成されたことが明らかである外来語系語基の M 結合をまとめて対象とする次第である。

本来は日本語にはなかった概念、新しい物事を表すことばが、外来語として日本語の中に編入され定着していく過程で新しく作られた複合語には、臨時的・統語的なものが他の語種より多く含まれている可能性が高く、句との比較が他の語種に比べて比較的容易であるとも見られる。特に「メール」は、予備調査で行った『CD 毎日新聞データ集』（2006）の外来語系語基中、W 結合も M 結合も使用度数が非常に高い語基であった。1991 年には使用例が少なかったが、インターネットや携帯電話の使用の影響で使用度数が大きく増加し、色々な W 結合と M 結合の生成と定着がみられる⁴⁾。

なお、調査対象とする「メール」は、携帯電話やパソコンのインターネットなどを經由してやり取りされる《電子メール》の意に限定し、「エアーメール」のような《郵便物》の意のものは対象外とする。また、「メル友」のような長音が省略された語形は対象外とする。

2.2. 調査資料

『CD 毎日新聞データ集』（1991～2006 年）の（表、図、記事見出しは除外した）全紙面の記事本文を資料として調査する。

3. 方法

本稿では、連接率で用いられた延べ語数ではなく、W 結合と M 結合の結合相手の異なり語数を散布図にプロットし、M 結合と W 結合の定量的関係を通時的に示すが、本題に入る前に本稿で使われる用語を含め、異なりで数える例についてまとめておく。

3.1. M 結合、共起成分、異なり共起成分

外来語系語基が他の語と結合し複合語を成しているものを M 結合とする。M 結合は、語の内部構造としての 1 次結合を取り出す⁵⁾。また、自立用法と結合用法の関係を見るためには、対象を統語的ないし臨時の複合語に限定するのが妥当である。しかし、通時的観点から複合語と句の定着などの遷移を考慮し、まずは M 結合と W 結合の実態を先んじて調べる必要があるため、語彙的複合語と統語的複合語（影山 1993）、或いは既成の複合語、新造の複合語、臨時の複合語（石井 2007）を区別せず、かなり幅広いものとして捉えている。

調査対象とする M 結合の場合、外来語系語基と結合する造語成分を「共起成分」、共起成分を異なりで数えたものを「異なり共起成分」と呼ぶことにする。「共起成分」は調査対象になる外来語系語基の前要素として結合するか、後要素として結合するかを区別する。例（1）では「中傷 -」が「メール」の前の共起成分、例（2）の「- 送信」は「メール」の後の共起成分になる。（2）と（3）のように同じ「送信」であっても前要素と後要素を区別し、別々の異なりとして数える。

例（1）「友人同士でやりとりした中傷メールに腹を立て、相手を呼び出して殴るけるの暴行を加えた」（中学 3 年女子）などがあった。[02/08/24/ 社会]

例（2）メール送信は長くても短くても、海外でも国内でも「アッ」という間のことである。[96/04/30/ 総合]

例（3）その秘密はどうやら、1 人の送信メールが全員に届く仕掛けにあるらしい。[97/10/06/1 面]

例（1）～（3）における M 結合は（1）「中傷メール」、（2）「メール送信」、（3）「送信メール」であり、共起成分は各々「中傷 -」「- 送信」「送信 -」である。したがって例（1）～（3）の「メール」の異なり共起成分は「3」になる。

3.2. W 結合、共起語、異なり共起語

単独で用いられた外来語系語基が助辞などを介して他の語と結合し句を成しているものを W

結合とする。W 結合の場合、M 結合とは違って 1 次になると結びつきが取り出せない場合が多いから、文の構造としての 1 次結合ではなく、直接結びついていると判断できる語に限定して取り出す。また、サ変動詞「メールする」は今回の調査対象には含まれていない。

W 結合における外来語系語基の結合相手を「共起語」とし、共起語を異なりで数えたものを「異なり共起語」と呼ぶことにする。W 結合も M 結合と同様、前と後の共起語を区別する。例 (4) では「送信する～」例 (5) では「～中傷する」が共起語となる（活用形の場合は代表形を示す）。

例 (4) J-フォン東海（本社・名古屋市）によると、送信されたメールを一時的に管理する 神奈川県内の中継施設の故障が原因。影響を受けた利用者は全国約 169 万人。

[01/03/03/ 総合]

例 (5) IT（情報技術）化の進展に伴い、携帯電話やインターネットを使いたいじめも目立ち、誰がかけたか分からないようにした携帯電話からの無言電話や嫌がらせ電話、メールで中傷する ケースもあるという。

[03/09/07/ 社説]

W 結合として結びつく相手は厳密には語だけではなく、例 (6) のように語より大きい単位もあり得る。例 (6) では「携帯電話を使い、同級生の女子高生 (16) を中傷する」、例 (7) では「返事を出す」とメールが結びついている。

例 (6) 携帯電話を使い、同級生の女子高生 (16) を中傷するメールを顔写真付きで不特定多数の人に送信したとして徳島県警生活安全企画課などは 21 日までに、同県立高校の女子生徒 4 人（いずれも 16 歳）を名誉棄損の疑いで書類送検した。[02/05/22/ 社会]

例 (7) 新しいメールにインターネットで返事を出す。

[96/01/28/ 解説]

(6) と (7) のように語より大きい単位と結びついている場合、W 結合の共起語は直接結びつく語に限定し、操作的に (6) 「中傷するメール」、(7) 「メールに出す」のように採り出す。

例 (4) ～ (7) における W 結合は (4) 「送信されたメール」「メールを管理する」、(5) 「メールで中傷する」、(6) 「中傷するメール」「メールを送信する」、(7) 「新しいメール」「メールに出す」であり、「送信する～」「～管理する」「～中傷する」「中傷する～」「～送信する」「新しい～」がそれぞれの共起語になり、異なり共起語は「7」になる。

本稿では共起語を取り出す際、構文解析ソフト「cabocha」を使った結果に手作業で修正を加え⁶⁾、W 結合の共起語を代表形として示す。以下に cabocha の結果を修正した代表的な例と対象外や保留とした例を示しておく。

例（８）買いたい方、メールをお待ちしています」と偽情報を入力し、応募してきた東京都目黒区の歯科医（３３）に代金を銀行口座に振り込ませてだまし取った疑い。

[92/05/14/ 社会]

	W 結合	共起語
Cabocha	メールを - お待ちしています」	お待ちしています」
修正後	メールを - 待つ	待つ

例（９）入会すればパソコン通信の感覚で、会員同士が電話やファクスを使いメールを交換できるほか、コンピューターの中に蓄積された情報を取り出すこともできる。

[92/05/22/ 総合]

	W 結合	共起語
Cabocha	メールを - 交換できる	交換できる
修正後	メールを - 交換する	交換する

例（１０）ただ、「メールを届いた順に処理しては、労働強化となるだけ。[96/04/07// 総合]

	W 結合	共起語
Cabocha	メールを - 届く	届く
修正後	メールを - 処理する	処理する

また、「なる」「する」のような形式語⁷⁾については、例（１１）「メールで（情報交換を）する」、例（１２）「メールが（無料に）なる」のように、今回は操作的に「～する」「～なる」しか取り出していない。この問題については今後の課題とする。

例（１１）毎日メールで情報交換をし、お正月にも戻れない彼女の元へ仕事納めの日を待ってご主人が越年に行かれた。

[06/01/13/ 解説]

例（１２）ソフトバンクモバイルは、自社間の通話やメールが無料になる新料金プランを 10 月下旬に発表し、「¥0」と表示する広告を展開したが、KDDI だけでなく、業界最大手のNTTドコモも「広告で 0 円を強調しているが、さまざまな条件が小さく書いてある」などとして、同法違反の可能性がある」と指摘していた。

[06//12/08/ 社会]

例（１３）（１４）のように W 結合における「引用文」＋メール（～とのメール、～というメールなど）については、今回は対象外とする。ただし、「に対する」「による」「における」のよう

に準副助辞的に用いる形式用言の連体形の場合は助辞と同じ扱いをする。

例(13) 一方で、テレビのワイドショーは連日「おめでた」ムードを盛り上げ、首相官邸ホームページにも「今国会は改正を見送るべきだ」というメールが増えた。[06/02/15/ 社説]

例(14)「おめでとうございます。あなたは私のデータベース 2000 件目です。偶然とはいえ、マルチメディア時代にふさわしい人に当たり、うれしい限りです。特に記念品は出しませんが、これも何かの縁でしょう」とのメールを彼のインターネットアドレスに送った。

[96/04/02/ 総合]

その他新聞社あてのメールアドレスの表示に使われる場合や()の中の用例は対象外とする。また、助数詞との W 結合と M 結合、並列表現 (A と B、A や B、A か B) の W 結合については、今回の通時調査では対象外とする。

以上の方法で「メール」の通時調査を行い、散布図を通して遷移パターンと W 結合と M 結合の関係について探索的に調査・考察する。

4. 調査の結果と考察

4.1. 「メール」の年代別使用頻度と接続率

表 1 は「メール」の 16 年間の使用頻度表 (延べ語数) である。91 年には自立用法も結合用法も非常に少なく、93 年まではあまり変化がないが、94 年から増加しはじめ、96 年からは爆発的に増え、01 年まで増加が続く。全体の使用頻度は 02 年から 05 年にかけては小幅な減少と増加を繰り返しながら 06 年にもう一度急激に増えている。

接続率は、ほぼ全期間を通して、徐々に減っている。これは自立用法が増加傾向にあることに対応している。実際、自立用法と結合用法の値をみると、最初は結合用法が優勢だったのが、頻度が大きくなるにつれ、結合用法だけではなく、自立用法も徐々に増加していく。接続率の通時変化にはこれが反映されていて、自立用法の増加とともに 91 年に 87.5%だったのが 06 年には 50.4%まで減っている。

しかし、接続率は、表 1 のように、自立用法と結合用法の延べ語数を用いた比率なので、どれだけ多くの種類の語と結合するかは確認できない。つまり、単に同じ結合相手が繰り返されているのか、新しい結合が増えているのか、という情報がない。そこで次節では W 結合と M 結合を種類、すなわち「メール」の結合相手の異なり語数を調査し、それぞれの折れ線グラフで示し、両者の増減の前後関係を検討する。

表1 「メール」の自立用法・結合用法と連接率(1991年～2006年)

	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
頻度	40	49	42	129	185	668	762	911	1329	1798	2341	1627	1536	1683	1284	2346
自立	5	2	5	24	39	157	159	196	313	639	1070	768	838	978	704	1164
結合	35	47	37	105	146	511	603	715	1016	1159	1271	859	698	705	580	1182
連(%)	87.5	95.9	88.1	81.4	78.9	76.5	79.1	78.5	76.4	64.5	54.3	52.8	45.4	41.9	45.2	50.4

(「結合」は結合用法、「自立」は自立用法、「連」は連接率)

4.2. W結合とM結合の折れ線グラフ

上記で取り上げたように、ある語基がどれだけ多くのW結合とM結合を生産するかをみるためには、共起語と共起成分を延べ語数ではなく異なり語数で数える必要がある。表2は、3で示した方法で取り出した「メール」の16年間のW結合とM結合の結合相手の異なり語数を示したものである。

表1に比べ、W結合の増加が目立つ。延べ語数で示した表1の値より異なり語数で示した表2の値でW結合が多い傾向をみせるということは、W結合における結合相手、すなわち異なり共起語の種類が多いこと、M結合の結合相手はW結合に比べ同じものが繰り返して使われている可能性が高いことを示している。

表2 「メール」のW結合とM結合

	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
W結合	7	2	6	24	33	115	114	151	203	346	485	347	378	374	354	526
M結合	2	5	4	7	12	39	59	72	89	126	144	109	113	109	99	132

M結合とW結合のそれぞれの変動を比較するため、図1に折れ線グラフを示す。

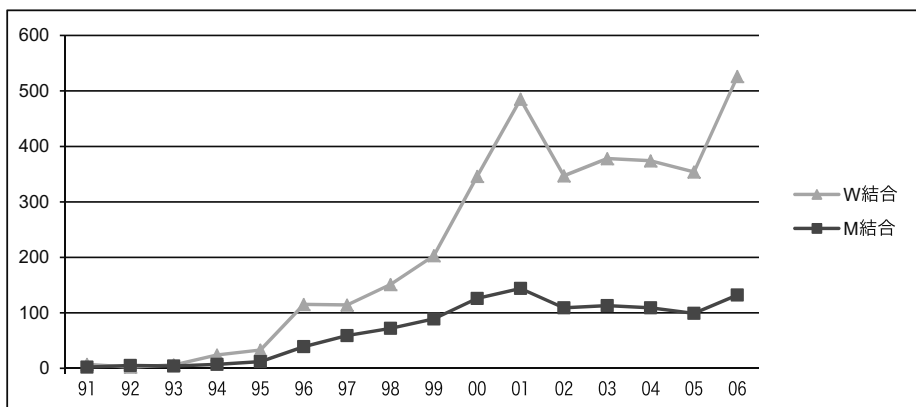


図1 「メール」のM結合・W結合の変動傾向

95 年までは両方とも徐々に増加し、96 年からは M 結合より W 結合の方が大幅に増加していることがわかる。また、M 結合が増加しはじめた 95 年に先だって、W 結合はすでに 94 年から増加の傾向をみせている。01 年に W 結合と M 結合はともに一度ピークを迎え、02 年は両方減少し、02 年から 05 年にかけては安定しているが、06 年にもう一度増加している。M 結合は W 結合に比べて 95 年からピークを迎える 01 年まで徐々に増えている。M 結合の傾き具合が緩やかな線を見せているのに比べ、W 結合は急激な伸びをみせていることから、増加する際は、M 結合より W 結合の変化が激しいと考えられる。W 結合はおおむね「緩→急→緩」という S 字カーブを描いているが、これは一般的な外来語の増加と同じ傾向を見せているともいえる。

図 1 で、通時データによる異なり共起語と異なり共起成分のそれぞれの変動傾向を見たが、量と方向性を考慮しつつ両者を同時に表示できる方法でその関係をみるために、次節では W 結合と M 結合という二つの変数を組み合わせてプロットした散布図を示す。

4.3. 「メール」の通時散布図

W 結合と M 結合の関係を示す方法として、両者を組み合わせて表示できる散布図を提示する。図 2 は、表 2 の W 結合の異なり共起語を X 軸に、M 結合の異なり共起成分を Y 軸にし、二つの変数の値を組み合わせてプロットした散布図で、16 年間の量的な遷移を示している。

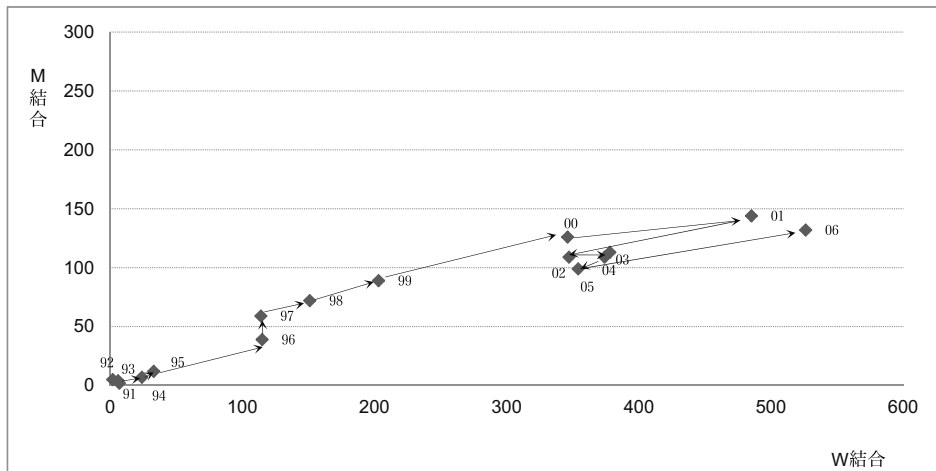


図 2 「メール」の通時散布図 (1991～2006)

図 2 をみると、原点の近くに固まっている 91 ～ 95 年には、W 結合・M 結合ともに多くなく、この時期の「メール」の生産性はあまり高くはないことがわかる。しかし 96 年から徐々に増加し、99 年、00 年、01 年にかけては大幅な増加を見せている。02 ～ 05 年までは異なり共起語も

異なり共起成分もやや減少し、ひとつの固まりになっていて、ある程度安定しているように見える。06 年には両方増加しているが、M 結合に比べ W 結合が大幅に増加している。

最初的大幅な増加をみせる 95～96 年の間は、共起語に「インターネット上～」「～アクセスする」、共起成分に「- アドレス」「- ウィンドー」「- サーバー」「- パスワード」「- フォルダ」「- ボックス」のようなインターネットと関連するものが多い。また、「送る～」「受信する～」「～送る」「～出す」「～届く」「～来る」「～やり取り」「～寄せる」「～見る」「～読む」「～交わす」のように、メールを送受信することと関係がある共起語が上位語に多い。この時期はパソコンなどの発達とともにインターネットを経由したメールの使用も広がりはじめた時期と考えられる。その後 98 年までは共起語に「悪質～」「不要～」、共起成分に「迷惑-」などが見られ、使用の広がりとともに否定的な意味をもつ形態素も登場している。

99 年と 00 年、00 年と 01 年の間は大幅に増加し、特に右の方へ大きくジャンプしている。この時期の上位の共起語には「PHS ～」「携帯電話～」「～打つ」、共起成分に「携帯-」などがあり、これらから携帯電話の使用の拡大と関連していることが予想できる。一方、「不審-」「迷惑-」「脅迫-」など、メール使用における否定的なイメージを与える共起成分も見られる。

02 年には 01 年まで大きく増加していたのが一度減少し、その後 05 年まで、原点付近の 91～95 年と同じように、再度一つの固まりになって停滞している。

05～06 年には再度大幅に増加し、特に異なり共起語が右の方へ大きく移動している。06 年の増加は、新聞で取り上げる社会の話題性と関わっていると見られる。記事を確認してみると、この時期はライブドア・堀江容疑者に関連した事件が話題となり、偽メールのことが新聞にたくさん取り上げられた時期でもあった。共起語「真意～」「信ぴょう性～」「偽物～」、共起成分「堀江-」「偽-」「- 問題」「- 騒動」などはそれを反映している。

このように「メール」の異なり語数を用いた W 結合と M 結合のプロットを通時散布図に示すことで、停滞と増減を繰り返す遷移パターンや、W 結合と M 結合が大幅に増加するときは、M 結合に比べ W 結合がより大きく増加する傾向があることが確認できた。また、上位を占めている共起語と共起成分から、爆発的な増加にはパソコン、インターネット、携帯電話、社会の話題性などが関わっていて、W 結合と M 結合の両方がその影響を受けていることがわかる。

ところで、図 2 の散布図は、年を隔てて繰り返し使われる結合と、ある年に初めて出現した結合とを区別していない。そこで、各年の初出の W 結合と M 結合に限って調査した結果を表 3 に示し、さらに、それを初出通時散布図（図 3）に描いて、図 2 の通時散布図と比較してみたが、両者に大きな違いはない。

また、表 3 の初出のデータから、16 年の間にただ 1 回だけ出現し、繰り返し使われたことがない W 結合と M 結合を抜き出してみたが（表 3'）、これも、ジャンプする時期と停滞する

時期の増減がほとんど重なっていて、大きな違いはない。ただ、M 結合に比べ W 結合の変動がより激しく、ここからも W 結合の方が話題性などの影響をより大きく反映しているものと考えられる。

表3 「メール」の初出の W 結合と M 結合 (1991 年～2006 年)

	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
W 結合	7	2	5	20	27	99	77	104	133	216	291	156	161	152	126	235
M 結合	2	3	1	5	8	31	45	44	46	67	67	37	46	34	39	54

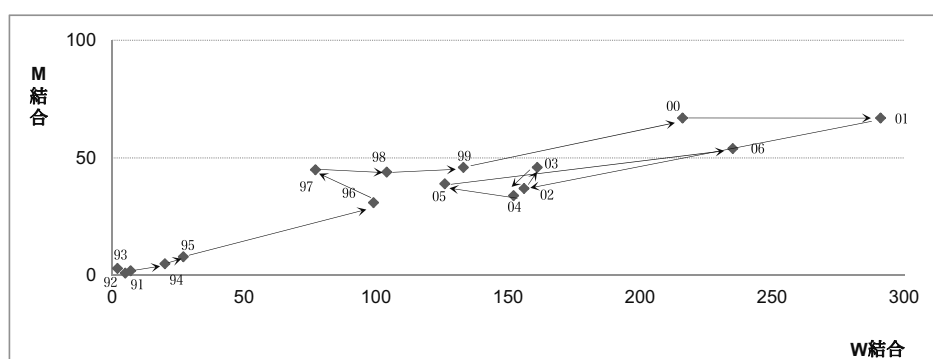


図3 「メール」の初出通時散布図 (1991 ～ 2006)

表3' 出現回数と頻度が「1」の M 結合と W 結合 (1991 年～2006 年)

	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
M 結合		1		2		8	13	23	20	34	39	21	30	21	24	34
W 結合	4		1	7	3	35	28	34	55	117	182	95	113	104	107	190

4.4. M 結合と W 結合の「専用」と「共通」

M 結合と W 結合の関係をみるために、両者を比較できる共通の結合相手を中心に量的分布を調査した。表4は、異なり共起成分と異なり共起語の重なり、すなわち、W 結合にしかならないもの、M 結合にしかならないもの、両方になるものなどについて調べ、その結果を示したものである。「専用」⁸⁾は M 結合と W 結合のどちらかにしかないもの、「共通」⁹⁾は M 結合と W 結合の共通の結合相手となる異なり共起成分と異なり共起語である)

表4からは、W 結合の「専用」が非常に多いことがわかる。これには、W 結合と M 結合の認定の差による影響もあるが、表3'のように、その場限りの W 結合が多いこともその要因として考えられる。

表 4 16 年間の M 結合と W 結合の「専用」と「共通」

	専用		共通		計	
M 結合	349	66%	179	34%	528	100%
W 結合	1578	89%	179	10%	1757	100%

「専用」の語種¹⁰⁾をみると、W 結合では和語・漢語が多いのに対し、M 結合では漢語が過半数を占め、それに外来語が続いて、和語は少ない（表 4'）。

W 結合「専用」の高頻度共起語には、「～届く」（502）「～やり取り（する）」（263）、「～寄せる」（178）、「～来る」（110）、「～使う」（72）、「送る～」（63）、「～出す」（69）、「届く～」（67）、「～受け取る」（48）など、メールの送受信に関する和語動詞が多い。これら高頻度の W 結合は、比較的固い結びつきと見られる。

表 4' M 結合と W 結合の「専用」と「共通」の語種

	W 専用		M 専用		共通	
漢 語	656	42%	184	53%	138	77%
外来語	65	4%	103	30%	18	10%
和 語	693	44%	38	11%	18	10%
混種語	159	10%	24	7%	5	3%
計	1578	100%	349	100%	179	100%

M 結合「専用」の高頻度共起成分をみると、外来語との結合には、「 - マガジン」（394）、「チェーン -」（30）、「スパム -」（15）、「フリー -」（13）、「 - アカウント」（12）などの専門語が多い。また、「迷惑 -」（298）、「写 -」（75）、「 - 友達」（42）など、名づけるもの、「ホット -」（14）、「わいわい -」（18）など固有名も見られる。その他「 - 代」（15）、「同 -」（7）、「 - 派」（6）、「 - 文」（4）、「 - 通」（4）など、接辞的な共起成分との結合も、W 結合と共通要素を持たない M 結合の特徴である。

「共通」の W 結合の構造としては、「X の M」（59）と「の X」（54）が多く、「M で X する」（34）「X する M」（26）「M を X する」（26）がそれに続き、これら 5 類で全体の 71% を占める。

次の表 5 は W 結合と M 結合の「共通」の要素中、どちらが先に出現するかをまとめたものである。

表 5 「共通」の M 結合と W 結合の先行型¹¹⁾

	先行型	割合
M 結合	67	37%
W 結合	69	39%
同	43	24%
計	179	100%

表 5 の結果では、「共通」中の M 結合先行型と W 結合先行型の数はほとんど変わらない。この結果から W 結合が必ず M 結合に先行して出現するとは限らないことがわかる。「W 先行型」と「M 先行型」、「同」に関する詳細を以下にまとめる。

表 6 「共通」の詳細

<W先行型>

前	後
[受信-(23)/受信する〜(12)] [携帯電話-(13)/携帯電話の〜(10), 携帯電話での〜(5), 携帯電話あちの〜(3), 携帯電話による〜(2), 携帯電話で〜(1), 携帯電話への〜(1)] [英文-(10)/英文の〜(3)] [請求-(9)/請求の〜(2)] [批判-(9)/批判の〜(7), 批判する〜(6)] [ウイリス付き-(8)/ウイリス付きの〜(2)] [送信-(5)/送信する〜(7)] [確認-(5)/確認の〜(1), 確認する〜(2)] [交換-(4)/交換は〜(1)] [緊急-(4)/緊急の〜(1)] [履歴-(4)/履歴な〜(5)] [間, 合わせ-(3)/間, 合わせの〜(4), 間, 合わせる〜(2)] [隠蔽-(3)/隠蔽する〜(2)] [おめでどう-(2)/おめでどうの〜(1)] [予告-(2)/予告する〜(9)] [未読-(2)/未読の〜(2)] [不要-(2)/必要な〜(4)] [交換-(2)/交換する〜(2)] [苦情-(2)/苦情の〜(12)] [意見-(2)/意見の〜(2)] [おぼろ-(1)/おぼろの〜(8)] [面直し-(1)/面直しの〜(2)] [面直す〜(2), 不審-(1)/不審な〜(5)] [諸者-(1)/諸者の〜(8), 諸者からの〜(4), 諸者から〜(1), 諸者との〜(1)] [注文-(1)/注文の〜(3)] [大量-(1)/大量の〜(4)] [宣伝-(1)/宣伝する〜(1)] [交換-(1)/交換の〜(1)] [議論-(1)/議論の〜(4)] [海外-(1)/海外からの〜(3), 海外との〜(1)] [PHS-(1)/PHSの〜(2)] [発表-(1)/発表する〜(2)] [安否確認-(1)/安否確認の〜(1)] [おせっ- (1)/おせっな〜(1)] [ヤン- (1)/ヤンからの〜(1)]	[- 交換(12)/〜を交換する(2), 〜の交換(2), 〜で交換する(9), 〜を通じて交換する(1)] [- 送受信(20)/〜の送受信(1), 〜を送受信する(3), 〜で送受信する(3), 〜によって送受信する(1)] [- 入浴(12)/〜の入浴(5), 〜が浴(7)] [- 入手(5)/〜を入手する(9), 〜で入手する(3)] [- 教(5)/〜の教(3)] [- リスト(5)/〜のリスト(2)] [- 転送(4)/〜を転送する(20), 〜で転送する(6), 〜に転送する(1)] [- 提供(4)/〜を提供する(8), 〜で提供する(3), 〜の提供(1)] [- 相手(4)/〜の相手(8)] [- 受け付け(4)/〜で受け付ける(30), 〜での受け付け(2), 〜を受け付ける(1)] [- 記載(3)/〜の記載(4)] [- 利用(2)/〜を利用する(31), 〜の利用(12), 〜が利用する(1)] [- 本文(2)/〜の本文(7), 〜は本文のみ(1)] [- 読み上げ(2)/〜を読み上げる(3), 〜の読みあげ(1)] [- 翻訳ファイル(2)/〜の翻訳ファイル(6)] [- 送り(2)/〜を送る(22), 〜で送る(108), 〜とともを送る(2), 〜だと送る(1), 〜に送る(1), 〜に対して送る(1), 〜を通して送る(1)] [- 受信者(2)/〜の受信者(3)] [- 言葉(2)/〜の言葉(1)] [- コミュニケーション(1)/〜によるコミュニケーション(1), 〜のコミュニケーション(1), 〜でコミュニケーションする(1)] [- 連絡(4)/〜で連絡する(24), 〜での連絡(1), 〜による連絡(1), 〜なら連絡する(1), 〜を通じて連絡する(1)] [- 予約(1)/〜での予約(4), 〜で予約する(1)] [- 返事(1)/〜の返事(5), 〜の返事(1), 〜で返事する(1)] [- 文字(1)/〜の文字(3), 〜での文字(1)] [- 不正接触(1)/〜の不正接触(1)] [- 読み(1)/〜を読み(6), 〜で読む(9), 〜から読む(1)] [- 登場(1)/〜が登場する(1)] [- 通報(1)/〜で通報する(3)] [- 対応(1)/〜の対応(2), 〜で対応する(1)] [- 打ち(1)/〜を打つ(7), 〜で打つ(1), 〜に打つ(1)] [- 告白(1)/〜で告白する(2)] [- 管理(1)/〜を管理する(2), 〜の管理(1)] [- 確認(1)/〜を確認する(4), 〜の確認(2), 〜で確認する(1)] [- 会話(1)/〜で会話する(4), 〜での会話(1), 〜のみの会話(1), 〜は会話(1), 〜を通して X(1)] [- 応募(1)/〜での応募(4), 〜び応募する(4), 〜による応募(1)]

＜M先行型＞

前	後
[電子 - (4482) / 電子の～(1)] [携帯 - (204) / 携帯の～(30), 携帯といえは～(1), 携帯への～(1)] [社内 - (31) / 社内での～(1)] [広告 - (31) / 広告の～(1)] [返信 - (28) / 返信する～(3), 返信の～(1)] [写真付き - (28) / 写真付きの～(5)] [ウイルス - (20) / ウイルスの～(1)] [勧誘 - (16) / 勧誘の～(2), 勧誘する～(1)] [抗議 - (15) / 抗議の～(13), 抗議する～(3)] [インターネット - (14) / インターネットの～(18), インターネットでの～(1)] [文字 - (12) / 文字だけの～(2)] [中傷 - (11) / 中傷する～(8), 中傷の～(4)] [警告 - (11) / 警告の～(3)] [応援 - (10) / 応援の～(3)] [i モード - (10) / i モードの～(4)] [着言 - (8) / 着言する～(3)] [嫌がらせ - (7) / 嫌がらせの～(4)] [質問 - (6) / 質問の～(4)] [ファン - (6) / ファンからの～(2)] [匿名 - (4) / 匿名の～(6)] [謝罪 - (4) / 謝罪の～(2)] [お祝い - (3) / お祝いの～(1)] [告発 - (3) / 告発の～(1)] [到着 - (2) / 到着する～(1)] [賛司 - (2) / 賛司の～(1)] [音声 - (2) / 音声の～(1)] [コンピューターウイルス付き - (1) / コンピューターウイルス付きの～(1)] [お知らせ - (1) / お知らせする～(1)] [配言 - (1) / 配言する～(2)] [同一 - (1) / 同一という～(1), 同一の～(1)] [通常 - (1) / 通常 of ～(2)] [出会い系 - (1) / 出会い系の～(1)] [私的 - (1) / 私的な～(1)] [企業 - (1) / 企業からの～(1)]	[- ソフト(52) / ～のソフト(2)] [- サービス(50) / ～のサービス(2)] [- サーバー(44) / ～のサーバー(2)] [- 友達(42) / ～は友達(1)] [- 機能(41) / ～が機能(1)] [- 受信(29) / ～の受信(12), ～を受信する(27), ～で受信する(3)] [- 作成(13) / ～を作成する(5), ～の作成(3)] [- 通信(11) / ～の通信(2)] [- 情報(9) / ～に関する情報(2), ～の情報(1)] [- 交信(9) / ～による交信(1)] [- 上(7) / ～の上(1)] [- 送付(6) / ～で送付する(5), ～を送付する(5), ～を通じて送付する(1)] [- 送信者(6) / ～の送信者(1)] [- 発言者(5) / ～の発言者(2)] [- 発信(5) / ～を発信する(40), ～で発信する(5), ～の発信(4), ～なら発信する(1)] [- パスワード(5) / ～のパスワード(1)] [- サイト(3) / ～のサイト(1)] [- 投稿(3) / ～による投稿(1), ～で投稿する(1)] [- 通知(3) / ～で通知する(13)] [- 利用者(2) / ～の利用者(1)] [- 速報(2) / ～で速報する(3)] [- 全文(2) / ～の全文(4)] [- 交際(2) / ～での交際(1)] [- 文字数(1) / ～の文字数(1)] [- 入力(1) / ～を入力する(2), ～で入力する(1)] [- 同報(1) / ～で同報する(1)] [- 登録(1) / ～から登録する(2), ～で登録する(2)] [- 中心(1) / ～が中心(1), ～を中心に(1)] [- 中継(1) / ～の中継(1)] [- 習得(1) / ～を習得する(2)] [- あて先(1) / ～のあて先(2)] [- 指導(1) / ～で指導する(1)] [- 好き(1) / ～が好き(1)]

<同>

前	後
[偽-(298)/偽の～(4)][脅迫-(49)/脅迫の～(2)][犯行予告-(24)/犯行予告の～(7)][激励-(16)/激励の～(9)][相談-(9)/相談の～(6)][私用-(7)/私用の～(1)][感染(6)/感染する～(6)][あて先不明-(5)/あて先不明の～(4)][攻撃-(3)/攻撃するとの～(1)][連絡-(2)/連絡の～(1), 連絡よ～(1)][訂正-(2)/訂正の～(1)][告白-(2)/告白する～(2)][報告-(1)/報告する～(2)][添付-(1)/添付する～(30)][告知-(1)/告知する～(1)][偽造-(1)/偽造する～(1)][感謝-(1)/感謝の～(2)][一部-(1)/一部の～(2)][哀悼-(1)/哀悼の～(2)][パソコン-(1)/パソコンの～(10), パソコンからの～(1), パソコンによる～(1)]	[- 問題(126)/～の問題(2)][- 送言(111)/～を送言する(138), ～で送言する(26), ～の送言(4), ～として送言する(1)][- 配言(38)/～を配言する(16), ～で配言する(13), ～の配言(2), ～を通して配言する(1)][- 相談(25)/～での相談(6), ～で相談する(6), ～の相談(3), ～による相談(1), ～だから相談する(1), ～で相談する(1)][- チェック(16)/～をチェックする(18), ～のチェック(7), ～でチェックする(2)][- 着信(10)/～の着信(3), ～が着信する(3)][- カウンセリング(7)/～によるカウンセリング(1)][- 着音(5)/～の着音(5)][- 提供者(3)/～の提供者(2)][- 受信料(3)/～の受信料(1)][- 恋愛(2)/～による恋愛(1)][- 仲介者(2)/～の仲介者(3)][- 写真(2)/～の写真(4)][- 作成者(2)/～の作成者(2)][- 活用(2)/～を活用する(9)][- 無料(1)/～が無料(1)][- 報告(1)/～で報告する(11), ～での報告(1)][- 仲介(1)/～を仲介する(3)][- 処理(1)/～を処理する(4)][- 自粛(1)/～の自粛(1)][- 原案(1)/～の原案(1)][- 禁止(1)/～の禁止(1)][- データ(1)/～のデータ(2)]

(「-」はM結合、「～」はW結合)

石井(2007:19-20)では、臨時の複合語「不良債権処理」と連語「不良債権の処理」「不良債権を処理する」の使用頻度を比較し、連語が先に現れるが、連語の使用頻度は減少に転じ、臨時の複合語は一貫して使われるという結果から、「はじめには臨時の複合語としてつくられた「不良債権処理」が、次第に既成の複合語として使われるようになっていく」とし、両者の関連性について説明している。今後より詳細にM結合とW結合の関係を論じるためには、既成、新造、臨時の複合語と関連付けながら論じていく必要がある。

本稿の調査対象には、臨時の複合語のほか既成、新造の複合語も含まれているとも考えられるから、「不良債権処理」のような例の他にも、「インターネットメール」のように、M結合が先に現れ、W結合の「インターネットのメール」の使用が増えていく例もある。特に「インターネットのメール」は、全体散布図と初出散布図で大幅な増加を見せた06年に使用例がない。予想できるのは、携帯電話からのインターネットを経由したメールの使用が普通になり、インターネットという概念を修飾語として使わなくなったからではないかということである。

表7「インターネット」

		91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
M	インターネットメール						2	4	3	2	2		1				
W	インターネットのメール									2	1		3	3	4	5	
	インターネットでのメール										1						

「パソコンメール」と「パソコンのメール」のように、同じ時期に現れたが M 結合はそれ以降現れない場合もある。

表8「パソコン」

		91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
M	パソコンメール								1								
W	パソコンのメール								1		2	2		1	1		2
	パソコンによるメール											1					
	パソコンからのメール											1					

「携帯電話のメール」という W 結合が先行して現れ、M 結合の「携帯電話メール」が完全に消えてはいないが、W 結合の使用が優勢である。また、使用例は少ないが、「携帯電話のメール」の他にも複数の W 結合がある。

表9「携帯電話」

		91	92	93	94	95	96	97	98	99	00	01	02	03	04	05	06
M	携帯電話メール											1	5	2	1	3	1
W	携帯電話のメール										7	25	25	32	34	25	24
	携帯電話からのメール											1	1	1			
	携帯電話によるメール											1		1			
	携帯電話でメール											1					
	携帯電話でのメール											1	1		1	1	1
	携帯電話へのメール														1		

その他、M 結合と W 結合において「共通」の結合相手であっても、W 結合の形式を考慮すると両者は必ず対応関係にあるわけではない。たとえば、M 結合「メール入手」の W 結合は、「メールを入手する」は一致しているが、「メールで入手する」は一致しない。また、「メール確認」は「メールの確認」「メールを確認する」は一致するが、「メールで確認する」は一致しない。より詳細な関係を論じるためにはこのような形式も考慮した分析が必要であろう。

5. まとめと今後の課題

M 結合と W 結合の関係を異なり語数を用いた通時散布図で表示すると、延べ語数を用いた数値に比べ生産性を考慮しながらより立体的、動的に示すことができる。このような散布図でみた「メール」の W 結合と M 結合の遷移パターンは、停滞→増加→停滞→増加→減少→停滞→増加という傾向を見せている。

新しい概念や話題性などによって M 結合も W 結合も増加するが、M 結合よりは W 結合の方がより活発である。特に 16 年の間 1 回しか出現しない、その場限りの臨時的な W 結合の量的変動傾向が、初出散布図の増加及び停滞の傾向と似ていることから、W 結合の方が話題性などの影響をより大きく反映していると考えられる。

「共通」の結合相手から見た W 結合と M 結合の量的関係は、W 結合しかないものが圧倒的に多かったが、M 結合先行型と W 結合先行型では両方同じ傾向を見せていることから、必ずしも W 結合が M 結合に先行して出現するとは限らないことが明らかになった。

また、今回の調査の結果、M 結合と W 結合の出現順による関係だけではなく、定着していくか、消えていくかなどによる類型が存在すること、さらに、「共通」の結合相手とはいっても、「メール入手」と「メールで入手する」、「メール確認」と「メールで確認する」のように構造が一致しないタイプの確認ができた。今後 M 結合と W 結合の関係をより詳細に論じるためには、このような類型分類の検討と分析が必要であろう。

注

- 1) 森岡(1994:102)は、文法研究の分野について橋本(『国語学概論』:211)の「(1) 単語より小さい単位によって、単語が構成せられる方法手段―語構成法、(2) 単語によって文節が構成せられる方法手段―文節構成法、(3) 文節によって文が構成せられる方法手段―文構成法」をあげ、森岡(1994)の文法論と一致することを述べていることから、語構成論を文法論の中に位置づけていることがわかる。また、「単語より小さい単位」を「形態素」、「単語」を「語基」、「文節」を「語」と言い換えると、それぞれ「語基構成法」、「語構成法」、「文構成法」となるが、「語構成法」と「文構成法」の間に「句構成法」があると考えられる。本稿における W 結合は句構成法、M 結合は語構成法に該当する。
- 2) 生産的な造語力をはかるためには延べ語数ではなく異なり語数を用いることについてはすでに樺島(1977)、石井(2007)などで指摘されている。
- 3) これは後に単独用法(以下自立用法)と結合用法の異なり語数と延べ語数の比率を求め、国立国語研究所の報告書 13(1958)に「語構成に関する分析」として再度まとめられた。
- 4) 高頻度 50 位中「メール」は使用度数 2346 で 22 位であった。
- 5) 例えば、「写真付きメールサービス」では[[写真付きメール]サービス]とし、「メール」との一次結合である「写真付きメール」が M 結合として取り出される。

- 6) Cabocha の解析結果によると「メール」の W 結合（2006 年）は延べで 1717 例だったが、修正後は 1537 例になった。
- 7) 森岡（1994:159）「本来自立して語（文の成分）を形成する可能性があるにもかかわらず、辞的機能を帯びて派生辞や屈折辞のような結合形式として機能し、他と合して一語相当の成分を構成する形態素」
- 8)「専用」とは、調査資料の上でのことであって、現実には存在するものもあり得る。本稿では便宜上「専用」とする。
- 9)「共通」は、基本的に同じ語形で、「メール」の結合相手として M 結合と W 結合における前と後の位置が一致するもの（携帯メールと携帯からのメール、メール交換とメールを交換する）である。また、1 字漢語以外の漢語・和語・外来語のサ変動詞語幹と名詞とが一致する場合（メールチェック／メールをチェックする）、和語系動詞の名詞形（メール送り / メールを送る）も「共通」としている。
- 10) サ変動詞の場合、語幹の語種を基準としたデータである。
- 11) このデータの中には、全体的な傾向を見るために各々 1 例しかないものも含まれている。

引用・参考文献

- 石井正彦（2005）「語構成研究と連語」『国文学解釈と鑑賞』第 70 巻 7 号
- 石井正彦（2006）「日本語研究における探索的データ解析の有効性」『日本語の教育から研究へ』くろしお出版
- 石井正彦（2007）『現代日本語の複合語形成論』ひつじ書房
- 石野博史（1992）「外来語の造語力」『日本語学』
- 石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』東京党出版
- 影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房
- 樺島忠夫（1977）「漢字の造語力」『言語』6-8
- 国立国語研究所（1971）報告 38『電子計算機による新聞の語彙調査Ⅱ』秀英出版
- 国立国語研究所（1972）報告 42『電子計算機による新聞の語彙調査Ⅲ』秀英出版
- 斎賀秀夫（1958）「語構成に関する分析」国立国語研究所報告 13『総合雑誌の用語—後編』秀英出版
- 斎賀秀夫（1997）「語構成の特質」斎藤倫明・石井正彦編『語構成』ひつじ書房
- 斎藤倫明（2004）『語彙論的語構成論』ひつじ書房
- 阪倉篤義（1957）「語構成序説」『日本文法講座 1 総論』明治書院
- 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店
- 玉村文郎（1991）「日本語における外来要素と外来語」『日本語教育』
- 西尾寅弥（1988）『現代語彙の研究』明治書院
- 野村雅昭（1977）「造語法」『岩波講座日本語 9 語彙と意味』岩波書店
- 林大監修（1982）『図説日本語』角川書店
- 林四郎（1982）「臨時一語の構造」国語学
- 森岡健二（1985）「外来語の派生語彙」『日本語学』4-9 明治書院
- 森岡健二（1994）『日本文法体系論』明治書院
- 山下喜代（1984）「語の構成要素」『早稲田大学日本語教育センター紀要』6
- 山下喜代（1995）「形態素と造語成分」『日本語学』明治書院
- 渡部洋（1985）『探索的データ解析入門—データの構造を探る—』朝倉書店

資料

『CD- 毎日新聞データ集』 1991 年版～ 2006 年版 毎日新聞

(博士後期課程学生)

(2010 年 8 月 19 日受付)

(2010 年 10 月 4 日修正版受付)

(2010 年 11 月 8 日再修正版受付)

(2010 年 12 月 9 日再々修正版受付)

(2010 年 12 月 21 日掲載決定)